

呉錦堂を語る会通信

NO.6 Jun. 2012

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」
Tel. 078-911-1671
編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員
発行日 2012.6.1



聞き取り、小東野開拓百年史（3）

《一口に小東野と言っても》《天王山から小東野見れば…》《呉錦堂屋敷》ほか
聞き取りの第3回は5月2日、小東野土地改良区の事務所で、大西美津代さん（昭和9年生まれ）からお話をお聞きしました。（編集委員 橋雄三）

《一口に小東野と言っても》

橋：かつて、お稲荷さんや呉錦堂のお祭りが、隣保回り持ちと聞いたことがあります。小東野にはいくつ隣保があるのですか。

大西：1、2、3、4、5、6、開拓とあり、2つに分かれている隣保もあります。



右から、呉伯瑄さん、大西さん、山本さん
（今年の初午のお祭りで）

橋：「開拓」というのは何ですか。

大西：戦後、満洲から引き揚げてきた人たちで、175号線の広谷バス停の辺りから西の国有地を与えられて住み着いたと聞いております。小東野開拓組合に属していましたが、15年ほど前、個人に分筆され、小東野自治会に加入しました。先ほどのお祭りの当番ですが、「開拓」は加わっていません。

橋：3年前の2月のお祭りにも来たのですが、その時は、呉錦堂顕彰碑にお供えがしてありました。今年の2月にはありませんでした。どうしてでしょうか。

大西：特に決まりとってないのですが…。世話をする人が、気が付かなかったのでしょうかねえ。だんだん若い人が多くなり、昔を知る人が少なくなってきたことによるのでしょうか。それから、同じ小東野自治会と言っても、呉錦堂さんが拓かれた土地は1から5隣保までです。6隣

保は175号線の小東野バス停に近い所で、呉錦堂さんの開墾当時、すでに集落がありました。そういうことにも関係があるのかも知れません。

橋：6隣保というのは、山本富恵さんたちの作った『ひらけゆく小東野』に、「私が幼い頃、小東野と言うと、旧小東野か新小東野かとよく聞かれたものです」という文章がでてきますが、その「旧小東野」の地区ですか。

大西：そうです。もと、竹内、小池、水沼という大地主が居て、三軒屋と呼ばれていたところでした。呉錦堂さんが拓かれた小東野は、山田川疎水の完成で水利が可能になった土地の高い所です。6隣保の175号線の小東野バス停の辺りは、ここよりずっと低い所で、かつては水利も別でした。

橋：ここのお祭りは秋にもあるそうですね。秋には子どもたちの相撲はないとのことですが。

大西：本来、2月はお稲荷さんの初午のお祭り、秋は呉錦堂感謝祭ということだったのででしょうか。秋は穫り入れ後ですから、呉錦堂感謝祭にふさわしいでしょうねえ。

※今年の2月、小東野のお祭りに行くと、呉錦堂顕彰碑の後、土地改良区の事務所の壁に「呉錦堂氏を称える碑」という新しいパネルができていて、気がついた。「平成23年10月小東野自治会 辛亥革命100周年記念事業」とある。このパネルでも、呉錦堂顕彰碑の説明に続いて、「毎年秋には感謝祭が顕彰碑前にて執り行われております」と記されている。

呉錦堂氏を称える碑

この呉錦堂顕彰碑は呉錦堂氏の功績を称えるため、1957年(昭和32年)5月に小東野の人々により集落の中心地に建立されました。
呉錦堂氏は果樹園経営を思い立ち、1907年(明治40年)頃兵庫農協の協力を得て松林であった小東野の土地141haを取得し、果樹園の開拓を進められました。その後、水田開拓に取り組み、その用水源として宮ヶ谷池と小東野池の築造にも取り組まれました。明治40年頃の小東野は数戸の農家があった程度でしたが、水田が60ha整備されたため池築造により近頃から多くの入植者が集まり、1917年(大正6年)小東野村が生まれました。今日の小東野集落の繁栄の基礎を築かれた呉錦堂氏の功績を称える顕彰碑が建立された際に、その偉業を後世に伝えるため、宮ヶ谷池が呉錦堂池と改称されました。中国革命の先覚者孫文氏は、たびたび神戸を来訪されており、呉錦堂氏は孫文氏の活動を支援されました。呉錦堂氏は移情關の建設者として広く日本で知られています。また、毎年秋には感謝祭が顕彰碑前にて執り行われております。

平成23年10月 小東野自治会
辛亥革命100周年記念事業

参考図書：「試験研究の歩み」兵庫農業総合センター編・「神出むかし物語」藤井昭三著 外



写真 呉錦堂氏
参考資料：孫文記念館所蔵
「續刻社白南湖全集」



《天王山から小束野見れば 裸馬だよ くらがない》

橘：この歌も前述、『ひらけゆく小束野』に出てきます。これは、どういう意味ですか。それから、天王山とはどの山ですか。

大西：天王山というのは雌岡山（めっこうさん）のことです。神出神社のある山です。この歌が歌っているのは本当のことです。馬の鞍と家の蔵を掛けているのですが、小束野には、蔵どころか納屋のある家さえ少なかったのです。納屋は農具や収穫物をしまっておくところで、ここで、農作業もします。納屋のない家は土間が納屋替わりでした。収穫後に刈り取った稲を干す稲木（いなぎ）のある家も少なく、ほとんどの家が地干し（じぼし）でした。

橘：大西さんの家は、どれほどの水田を耕作していたのですか。

大西：一番多い時では4町も作り、納屋が二つあり、馬も2頭いました。農繁期には人手が足りず、同じ村の中だけでなく、古神とか、近くの村からも手伝いが来ていました。私の家は例外で、5～8反の家が多かったと思います。収穫の中から小作料を納めますから、村の生活は苦しかったです。小束野の人々が、周りの村並みの生活ができるようになったのは農地改革より後のことです。



《呉錦堂屋敷》

橘：昭和10年ごろまでは、雌岡山の北西の山すそに、白壁づくりの、まるで酒蔵のような大きな呉錦堂屋敷が残っていたといいます。今、「かんでかんで」ができていますよね。ところで、大西さんは、昭和9年のお生まれですが、呉錦堂屋敷について、何か記憶がありますか。

大西：小学生の頃の事です。毎日、屋敷の横の道を通って通学していました。当時は、すでに、加藤（岩五郎）さんの所有になっていましたが。今の「かんでかんで」前の駐車場は、当時、水の無いから池でした。道沿いは竹やぶで、その奥、少し高い所に屋敷があり、屋敷の北側は広場で、広場の端に

納屋があり、更に、梨園と続いていました。梨園の外れに粗末な建物があって、お遍路さんが泊まったり休んだりしていました。（右の写真は、「かんでかんで」の西斜面、道路脇にある「呉錦堂屋敷跡」の標識）



《秋祭りのない小束野村》

橘：この辺り、播州の秋祭りは、総じて派手で、にぎやかです。私の生まれ育った村では、村人は、住吉神社の氏子で、秋祭りには、若者は神社の境内で太鼓や神輿を担ぎ、子どもたちは屋台で食べ物などを買うのが楽しみでした。でも、小束野にはこのような秋祭りがないと聞きました。

大西：大正か昭和の初めころと思います。雌岡山の神出神社に、頼みに行ったが断られ、氏子になれなかったそうです。戦後、神社の方から誘いに来たが、先の経緯もあり、今度はこちらが断わったと聞いています。だから、小束野には神社も秋祭りもありません。2月と11月のお稲荷さんのところでのお祭り、特に子どもたちの相撲は、それに代わる楽しみという意味合いがあったと思います。

《その他》

橘：その他、開墾時代のことなど、ありますか。

大西：父から、「開墾当初、呉錦堂さんが瓦葺きの家3、4軒と藁葺きの家十数軒を建て、瓦葺きの家には偉い人を、そのほかの人は藁葺きの家に住ませた」という話を聞いたことがあります。

橘：呉錦堂のお孫さんの伯瑄さんが、大西さんの家は、最初の入植の21軒のうちの1軒だとおっしゃっていましたから、大西さんの家は、お話のうちの1軒だったのでしょねえ。

大西：そうだと思います。

橘：大西さんの家は瓦葺の方だったのでしょうか、それとも藁葺の方だったのですか？

大西：さあ、そこまでは聞いておりません。

大西さんのお話は大変興味深く、気がつくとも2時間が過ぎていた。たくさん失礼な質問もしました、ご容赦ください。